

二つの伝西行筆『源氏物語』竹河の仮名表記

竹  
部  
歩  
美

『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）  
第17巻第2号（2019年3月）抜刷

【論文】

二つの伝西行筆『源氏物語』竹河の仮名表記

竹部 歩美

はじめに

『源氏物語』竹河の写本には、西行（元永元〔一一一八〕年～建久元〔一一九〇〕年）<sup>①</sup>の筆であると伝わるものがある。静嘉堂文庫蔵本（以下、静嘉堂本）と天理大学附属天理図書館蔵本（以下、天理本）がそれである。しかし、この二つの写本は、同じ伝西行筆とされながら、その筆跡は同一人物の手に拠ると思われないほどに異なる。また、次例のような本文の異同も多数ある<sup>②</sup>。

○風荒らかに吹きて、夕方……静嘉堂本、一六ウ⑨  
○また風の荒らかに吹きたる昼つ方……

〈天理本、二二ウ③④〉  
○君に仕うまつることは、それが心安きこそ、昔より興あることにはしける。

○君に仕うまつることは、これが心安きぞ、昔より興あることにはしけれ。  
〈静嘉堂本、二七オ⑧⑩〉

さらに、文字表記や変体仮名の運用の様相も、それぞれに特徴を見出せるほどに異なっている。そこで、本稿は、この、二つの伝西行筆『源氏物語』竹河を比較しつつ、変体仮名による表記に関して、それぞれに特徴的な点が見られることについて述べることにする。

静嘉堂本のテキストには財団法人静嘉堂（一九八〇）を使用し、天理本のテキストには天理大学出版部（一九七八）を使用する。静嘉堂本の丁数は本文の開始部分を一二表として私に付した。以下では、用例は字母で示し、私に表記を改めた校訂本文を併記する。影印の改行箇所は／で、判

読不能箇所は□で示す。また、『源氏物語大成校異篇』本文（以下、『大成』）を校訂して示す場合がある。

## 一・静嘉堂本と天理本

静嘉堂本と天理本は『大成』では別本系の写本として収録されている。

静嘉堂本は半葉が12行の四十丁から成る。テキストは一七丁裏十二行目の一部が画像不鮮明のため判読不能である。静嘉堂本については『大成』の『研究資料篇』の解説「伝西行筆宿木斷簡」で触れているところがあり、そこには、静嘉堂本の書写年代について「河内本成立以後に書かれたものではない」とある。

天理本は半葉が10行（一〇丁裏のみ9行）の五十丁から成るが、一五丁表裏、四九丁表〳五〇丁裏は別筆で補われている<sup>③</sup>。また、二九丁と三〇丁の間、三七丁と三八丁の間、四三丁と四四丁の間の三か所に落丁がある。テキストの解題<sup>④</sup>に拠れば、天理本は鎌倉時代の書写とされ、『大成』の『研究資料篇』の解説「大島氏舊藏傳西行筆竹河卷」では「書寫年代は鎌倉初期をくだるまい」とされている。天理本の書写年代をこのように推測する根拠を、前掲の解説「大島氏舊藏傳西行筆竹河卷」では「貫之自筆と稱せられる蓮華王院寶藏の土佐日記は平假名「す」に「數」の草體を用いている」ことにあるとしているようであるが、本稿第

二節で見ると、スの字母「數」は天理本にも静嘉堂本にも使用例がある。

これらに従って、この二つの伝西行筆の竹河の書写年代が鎌倉時代初期から中期であるとしたとき、この二つは、『源氏物語』写本のなかでも古いものに属することになり、書写年代が鎌倉時代を遡ることのないとされる『源氏物語』においては、この点で、この二本の伝西行筆本は軽視することのできないものであると言えよう。

なお、本稿では以後、天理本について、別筆で補われたとされる部分を「天理本補筆」と呼び、それ以外の部分を「天理本」と呼ぶこととして、天理本と天理本補筆とを区別して扱う。また、本稿での考察は、静嘉堂本と天理本とを主として行うこととする。天理本補筆については特筆すべき点がある場合に触れる。

## 二・資料中の文字種の相違

まず、資料中に用いられる文字種について確認する。見せ消ちは考察対象から除外する。

資料中には、漢字・平仮名・片仮名・反復記号が使用されている。

反復記号には「ゝ・ゝ・ゝ・く」が見られる。

片仮名は静嘉堂本にのみ見られる。これらは本文の右側に書き込まれており、書き落とした文言等を補ったものの

ようである。

○<sup>スカトモ</sup> ○<sup>イトカ</sup> 〈静嘉堂本、一六オ⑩〉

○あやにくなる〈静嘉堂本、二〇オ②〉

○お者春<sup>ル</sup> ○<sup>我ッ</sup> 〈静嘉堂本、二三オ⑨〉

○給者年八<sup>我ッ</sup> ○む可しより 〈静嘉堂本、三三ウ⑥〉

## 二・一・使用される漢字の相違

資料中に見られる漢字<sup>⑤</sup>を使用頻度の高い順に挙げると次のようになる。なお、「…」より下にある漢字は用例数が3、「二」より下は用例数が2、「三」より下は用例数が1である。

静嘉堂に見られる漢字は次のとおりである。

給御心人事君中将院宮殿思大申月少方侍左右源女見所  
言三上条内納又日我六許臣身相物猶宰四世返弁…一經  
時十前二廿也位一衛花候七天八兵本木覽二下近九故行  
従春神水地丁東道入部風仏呂

天理本に見られる漢字は次のとおりである。

御心人給思院宮将大中女殿右少物月三条日花言上納弁  
四六我源申世位左事臣…一時十方一君行今春廿八本木  
二官丸許卿饗九五哉山七小身西前相丁二番部文兵返門  
天理本補筆に見られる漢字は次のとおりである。

給人御心侍從中…君思世大物聞一右宮源言故宰将相年  
納夜二哀位衛花我議月見此左三參四七車出春所少申身  
程殿殿頭督勾廿日忍梅八比非兵弁方北又夕里涙

このように、「給」「御」「人」「心」の使用頻度の高さが共通して見られるが、静嘉堂本と天理本との間で「給」の使用頻度に相違が認められる。また、用例数が3以上のものに注目したとき、静嘉堂本では「事」「君」「申」の使用頻度が高いのに比べ、天理本では低いことを指摘することができる。さらに、静嘉堂本に「侍」「見」「所」「内」「又」「猶」の使用例があるのに対し、天理本では使用例がないことを相違点として挙げることができる<sup>⑥</sup>。なお、「給」「申」「侍」は敬語動詞としても使用されるものであるので、第四節で改めて考察する。

## 二・二・使用される変体仮名の相違

静嘉堂本と天理本と天理本補筆に見られる変体仮名の種類と出現頻度は、次の【表1-1】・【表1-2-1】・【表1-2-2】のとおりである。用例数の空欄は用例のないことを示す。なお、現行の平仮名字母についてのみ、漢字字体に近い平仮名字体に近い例え「於」が「お」に近い「於」に近いという具合に―を恣意的に区別している<sup>⑦</sup>。そのため、現行の平仮名の字母については表中に漢字字体と平仮名字体の項目を設けてある。また、「江」は資料中ではヤ行に活用する語のエ段音を表す場合がある（第三節―五で述べる）ので、便宜的に、ヤ行エ段音の仮名として扱うこととする。さらに、「ん（字母「无」）」は<sup>mu</sup>・<sup>mo</sup>・<sup>N</sup>を表し得<sup>⑧</sup>、実際に資料中にはその用例が見

[illegible]

	ワ	ラ	ア	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
无 人 138	工和 一和77	麗良ら 307	也や 169	満万末 623	壁者八波 18 252 284 73	那奈な 173 12 409 3	多太た 3 718 31	佐左さ 8 304	関加か 562 232	阿安あ 217
	井為み 26	里り 220	身見二美 1 6 270	実み ミ	日飛比 90 175 56	耳二丹尔 1 64 492	知地知 チ 170	新志之 シ 161 809	起支幾 2 149 325	伊以い 379
		黒留る遊由ゆ 107 267 69	ム ユ	無武む 93	不ふ 11 2 186	奴ぬ ヌ 57	川つ ス 236	須泰寸 4 3 107 16 5	久く 1 1 252	宇う 390
	エ 恵え 12 5	連禮れ 13 25 225	江江 14 149	免女め 16 146	遍部へ 270	年祢ね 1 43	帝天て 3 431	勢世せ 83 3	希个気運計け 3 16 49 193 2	衣え 106
	ヲ 速達そ 6 287	呂ろ 84	与よ 154 22	云母も 25 278 86	保ほ 本 218	農能乃の 32 591	東登止ト 3 778	楚所曾ソ 2 127 15 5	古己こ 442	於お 1 28

左ん 1	王	和 わ		羅	良 ら		也 や		満 万	末 も	盤 ばん	八 はち	波 は		那 な	奈 な	堂 どう	多 た		佐 さ	左 さ		可 か	加 か	阿 あ					
	2	2		13	13		11		2	10	4	16	10		10	15	6	14	太 た	2	左 さ		1	37	9	あ				
		半			リ				身	見 み	美 み		比 ひ		二 に	丹 に	地 ち	知 ち		新 しん	志 し			起 き	幾 い	伊 い				
		井 み			利 り				1	4	8		2	比 ひ	12	5	20	9	10		3	之 し		5	28	11	19			
					ル			ユ		ム			ブ		ヌ		川 かわ	ッ つ							ク	ウ				
				流 りゅう	黒 くろ	類 るい	留 る	遊 ゆう	由 ゆう	ん	無 む	武 ぶ	不 ふ		奴 ぬ	奴 ぬ	徒 た	数 すう	須 しゆ	寿 しう	寸 すん			九 く	久 きう	宇 う				
				6	1	14	2					3	6		2		5	3	3	5	7	3	1	8	7	20				
							エ		江 え		免 めん	女 め		部 ぶ		ネ		天 てん		勢 せい	世 せい		希 き	个 こ	氣 き	計 けい	エ			
		衛 ゑい	惠 ゑい		連 れん	禮 れい	札 せ	江 え			3	女 め	11	12	福 ふく	年 ねん	裕 よ	帝 てい	天 てん	2	2					衣 い				
				2	5											2	2	帝 てい	天 てん	2	2					3				
							ロ		ヨ		モ			ホ			ノ		ト		ソ					コ				
		平 へい	越 えつ	遠 えん		路 ろ	呂 ろ	1		与 よ	雲 うん	母 ぼ	毛 もう	5	保 ほ	3		能 のう	乃 のう	15	12	止 し	2			曾 そう	オ			
		5	7						9	2		5	18				4	13	10	15		12	止 し	2		曾 そう	3	17	3	12

られるので、これを表中に振り分けて示す（以下、ムを表す「ん」を「ん（ム）」、ノのそれを「ん（モ）」、Nを「ん」と示す<sup>⑨</sup>）。

このように一覧してみると、静嘉堂本と天理本に使用される変体仮名の出現の傾向と、天理本と天理本補筆の出現の傾向には明確な相違のあることがわかる。

使用される変体仮名の文字種は、静嘉堂本のほうが天理本よりも多い。「阿」「閑」「氣」「古」「寿」「勢」「地」「遅」「帝」「東」「乃」「遍」「満」「見」「無」「ん（ム）」「裳」「羅」「梨」「留」「累」「流」「禮」「路」「井」「乎」は静嘉堂本には使用例があるが、天理本にはない。一方、天理本にのみ使用例があるのは「九」「天」である。

変体仮名の使用頻度にも相違が見られる。静嘉堂本においては「於」「可」「个」「希」「佐」「新」「曾」「堂」「川」「徒」「奈」「者」「ひ」「本」「万」「三」「身」「免」「も」「り」「連」「越」の使用頻度が高く、天理本では低い。一方で、天理本では「か」「支」「け」「志」「数」「所」「多」「那」「二」「ま」「み」「母」「江」「類」「衛」の使用頻度が高く、静嘉堂本では低い。

天理本と天理本補筆を比較すると、天理本には「伊」「盈」「支」「九」「け」「希」「新」「数」「天」「二」「耳」「ね」「年」「は」「日」「布」「万」「身」「母」「ん（モ）」「江」「礼」「王」「ゐ」「ゑ」「衛」の使用例があるが、天理本補筆にはない。これに対し、天理本補筆には「阿」「閑」「氣」「古」「勢」

「帝」「丹」「祢」「乃」「農」「満」「見」「裳」「留」「禮」の使用例があるものの天理本にはない。このうち、「農」は、静嘉堂本にも使用例がないので、「農」の使用は天理本補筆の変体仮名使用の特徴であると言い得る。

このように、静嘉堂本と天理本に使用される変体仮名の出現頻度は明らかに相違がある。また、天理本と天理本補筆の間にも相違がある。

### 二・三・漢字表記と変体仮名の使用頻度の関連

ところで、静嘉堂本と天理本の間には、漢字「君」「給」の使用頻度の差異のあることと、変体仮名「支」「多」の使用頻度に差異のあることには関連がある。

静嘉堂本では「君（きみ）」（これを語構成要素に持つ複合語を含む）は83例あり、そのうち47例が漢字で表記され、36例が仮名表記である。これに対し、天理本ではこれを仮名で表記する傾向が高く、81例中の76例を仮名で表記し、このうちの59例を「支み」と表記する。つまり、「支」の4割は「君（きみ）」の表記のために使用されているのである。

静嘉堂本ではタマフ・ノタマフ・ウケタマハルのタマを漢字で表記する傾向がある（第四節で述べる）。一方、天理本では、これを仮名で表記する傾向があり、そのタの音節の表記に「多」を多用する。天理本ではタマフ・ノタマフ・ウケタマハルが合わせて322例あり、漢字表記54例、仮名表記268例であるが、仮名表記例のうち262例が、そのタの音節

の表記に「多」を使用している。敬語動詞は頻用される語の一つである。そのため、天理本では変体仮名「多」の使用頻度が高くなったと考えられる。

このように、資料中における漢字「君」と仮名「支」、漢字「給」と仮名「多」の使用頻度の差異には関連性が認められる。

### 三・仮名の運用の特徴

第二節に見た資料中の変体仮名の運用法に注目すると、静嘉堂本と天理本には、それぞれ、特徴が認められるものがある。

#### 三・一・静嘉堂本の「お」の使用上の特徴

静嘉堂本の「お」<sup>323</sup>例は、そのうちの307例が自立語の表記に用いられるのだが、残る16例は付属語の格助詞ヲ・接続助詞ヲ・接続助詞モノヲの表記に用いられる。天理本には付属語の表記に使用される「お」の例はない。なお、静嘉堂本においても天理本でも「於」が付属語の表記に用いられる例はない。

天理本では格助詞ヲと接続助詞ヲが合わせて164例あり、「を」<sup>159</sup>例、「越」<sup>5</sup>例がその表記を担う。接続助詞モノヲ2例には「を」が用いられている。一方で、静嘉堂本には格助詞ヲと接続助詞ヲが合計189例あるが、その助詞ヲの表

記を担うのは、「を」<sup>128</sup>例、「越」<sup>44</sup>例、「お」<sup>14</sup>例、「ヲ」<sup>2</sup>例、「乎」<sup>1</sup>例である。接続助詞モノヲは4例あるが、2例に「を」、2例に「お」が使用されている。

このように、助詞のヲの音節の表記に「お」を使用するのは静嘉堂本の特徴の一つであると言える<sup>10)</sup>。

○この御あり佐万と毛おい可て…なと於毛ひ／給へ里

〈静嘉堂本、一四オ③〉

(この御有様どもを、「いかで…」など思ひたまへり。)

○きこえ／堂まひし人／くな可乃君おとうつろふ毛あ

／里 〈静嘉堂本、二五ウ⑨〉

(聞こえたまひし人々、「中の君を。」とうつろふも

あり。)

○めく者勢堂て万つら満し可八こよな可ら満／しもの

おと 〈静嘉堂本、二二オ⑪〉

(「目くはせたてまつらましかばこよなからましものを。」と)

○さ許のまきれ尔あら／しものおとて八

〈静嘉堂本、三八オ⑩〉

(「さばかりの紛れにあらじものを。」としては)

#### 三・二・静嘉堂本における「ん(ム)」の使用

ムの表記には、天理本では「む」のみが用いられるのに対し、静嘉堂本では「む(武)」「無」「ん(ム)」が用いられる。まずは、この点において、二本間の仮名使用の傾向

が異なる。

静嘉堂本において「無」は助動詞ム<sub>レ</sub>の表記に用いられている。「む」は、付属語（助動詞ム<sub>レ</sub>・ラム<sub>レ</sub>・係助詞ナム）と、自立語のム<sub>レ</sub>（昔・恨ムなど）、N（女・ヤムゴトナシなど）、語頭のム<sub>レ</sub>（ム<sub>レ</sub>（梅・生マル）の表記に用いられる。「む」「無」が付属語の表記に用いられるのに対し、「ん（ム）」は付属語の表記には使用されず、自立語にのみ使用されており、語頭のム<sub>レ</sub>（ムコ<sub>レ</sub>（婿）・ムツキ<sub>レ</sub>（睦月）・ムツブ<sub>レ</sub>（睦ぶ）・ムゲナリ<sub>レ</sub>）、語中のム<sub>レ</sub>（ウチャスム<sub>レ</sub>（休む）・ナグサム<sub>レ</sub>（慰む）・フム<sub>レ</sub>（踏む））、語中のム<sub>レ</sub>（ミズウマヤ<sub>レ</sub>（水駅））の表記に用いられる。ただし、「水駅」のム<sub>レ</sub>（ム）は語構成要素の後項の頭音であるから、語頭に準ずると言えよう。

このように、静嘉堂本は自立語のム<sub>レ</sub>・ム<sub>レ</sub>（ム）の表記に「ん（ム）」を用いる例が見られる。この点が、静嘉堂本の表記上の特徴の一つであると言える。

○ん月乃つい多ちころ

〈静嘉堂本、五ウ①〉

（正月のついたちごろ）

○あ那くるし新者しうちや春ん／へきル

〈静嘉堂本、二九オ④〉

（あな苦し。しばしうち休むべきに）

○み川ん万やおなん人くと可免きこゆめ里／し

〈静嘉堂本、一二オ⑩〉

（水駅をなん、人々咎めきこゆめりし）

### 三・三・「志」の使用傾向の相違

静嘉堂本と天理本とは「志」の使用頻度に大差があり、天理本において「志」は多用されている。

また、その「志」の用い方にも相違がある。静嘉堂本では「志」は自立語の表記にのみ用いられる。これに対し、天理本では、自立語（142例）のみならず、付属語の過去の助動詞キ・副助詞シ・格助詞シテ・終助詞カシ・テシガナ・助動詞マホシのシの音節を表すのに用いられる（19例）。

○い尔しへおほし／をきて志尔多可へ春も可那

〈天理本、一八ウ⑨〉

（いにしへ思しておきてしにたがへずもがな）

○さ者可りのゆめを多尔／みて志可な

〈天理本、二六オ⑨〉

（さばかりの夢をだに見てしがな。）

さて、「志」は、中世以降に自立語頭のシの音節を表すことで知られるものであるが<sup>12</sup>、資料中にも同様の傾向が見られる。静嘉堂本の「志」は44例中の37例（複合語の後項要素の語頭10例を含む）が自立語頭のシの音節の表記に使用されている。一方で、天理本の自立語に用いられる142例の「志」のうち自立語頭のシの音節を表すのは76例（複合語後項要素の語頭16例を含む）である。

○くら井八さりて志つ可尔お者しまし

〈静嘉堂本、三八オ②〉



(位は去りて静かにおはしまし)

○とう志ゝうの許／にお者し多り〈静嘉堂本、九オ⑩〉

(藤侍従のもとにおはしたり)

○をひさ支志るく毛の志多／まふ

〈天理本、五ウ⑧〉

(生ひ先しるくものしたまふ)

○お毛ほ／えぬこと那里け里と思志ら類

〈天理本、三八オ⑧〉

(思ほえぬことなりけりと思ひ知らる)

このように、資料中の「志」は自立語頭のシの表記に用いられる共通の傾向があるが、静嘉堂本では「志」全体の約8割が自立語頭で用いられるのに対し、天理本では約5割であって、その傾向には異なりがある。また、天理本では、自立語中のシの表記例も約4割と多く、付属語の表記例も全体の約1割を占めており、静嘉堂本と天理本の「志」の使用傾向は相当に異なると言える。

### 三・四・ハ(バ)の表記の傾向の相違

資料中において、ハ(バ)の表記には、「は」「ハ」「者」「盤」が用いられる。*/Pa/*・*/wa/*・*/ba/*の三つの音韻を表記し得るこの四字の使用頻度をまとめたのが【表2-1】【表2-2-1】である。参考として、天理本補筆についても【表2-2-2】として示す。自立語については語頭か語中かを区別する。接頭辞「御」を冠するものは語頭の用例とし

て扱っている。

静嘉堂本【表2-1】と天理本【表2-2-1】から、まず明らかになるのは、静嘉堂本では「者」に用例が集中すること、一方で、天理本では「ハ」「者」の用例が多く、かつ、この二字の用例数が同程度であること、天理本と静嘉堂本のいずれにおいても「盤」の用例は少数であることの三点である。

「は」「ハ」「者」「盤」の個別的な傾向について、まず、音韻に注目すると次のことが指摘できる。

*/Pa/*の表記には、静嘉堂本においても天理本においても「者」を使用する傾向が顕著であり、「者」は殊に自立語頭の*/Pa/*の表記に多用される。なお、静嘉堂本に見られる自立語中の*/Pa/*を表記する「者」の2例とは、さくら者那「桜花」・佐くら者那「桜花」である。天理本に見られる7例の語とは、うち者て(うち果て)・をし者可ら「推し量ら」・をし者可り「推し量り」(2例)・心者つ可しう「心恥づかしう」・心者つ可しけ尔「心恥づかしげに」・さし者那れ「さし離れ」である。いずれも合成語の後項の語頭のハであって、自立語頭の*/Pa/*の表記に準ずるものとして扱ってよいと考える。よって、資料中では、「者」は自立語頭の*/Pa/*を表記していると言える。

*/wa/*の表記には「ハ」「者」が使用される傾向が見られるが、天理本では「ハ」の用例がやや多く、静嘉堂本では「者」に非常に多くの用例が見られるという点に使用傾向の相違

【表 2-1】 静嘉堂本のハの仮名の使い分け

合計	盤			者			八			は				
	付属語	自立語		付属語	自立語		付属語	自立語		付属語	自立語			
118		語中	語頭		語中	語頭		語中	語頭		語中	語頭	小計	/Fa/
					2	111			5					
					113			5						
				113			5							
440	6	語中	語頭	85	語中	語頭	90	語中	語頭	54	語中	語頭	小計	/wa/
					178			22			4	1		
					178			22			5			
	6			263			112			59				
158	3	語中	語頭	65	語中	語頭	36	語中	語頭	29	語中	語頭	小計	/ba/
					19			5			1			
					19			5			1			
	3			84			41			30				
3				3									計	不詳
719	9			463			158			89			合計	

【表 2-2-1】 天理本のハの仮名の使い分け

	盤			者			八			は				
合計	付属語		自立語	付属語		自立語	付属語		自立語	付属語		自立語		
110		語中	語頭		語中	語頭		語中	語頭		語中	語頭	小計	/Fa/
			1		7	90			9			3		
	1			97			9			3				
	1			97			9			3			計	
386	11	語中	語頭	16	語中	語頭	138	語中	語頭	44	語中	語頭	小計	/wa/
		4			118			44			11			
		4			118			44			11			
	15			134			182			55				
131	2	語中	語頭	9	語中	語頭	88	語中	語頭	11	語中	語頭	小計	/ba/
					12			5			4			
					12			5			4			
	2			21			93			15				
0												計	不詳	
627	18			252			284			73			合計	

【表 2-2-2】 天理本補筆のハの仮名の使い分け

合計	盤			者			八			は					
	付属語	自立語		付属語	自立語		付属語	自立語		付属語	自立語				
3		語中	語頭		語中	語頭		語中	語頭		語中	語頭	小計	/Fa/	
						3									
					3										
	4			3											
22	4	語中	語頭	3	語中	語頭	4	語中	語頭		語中	語頭	小計	/wa/	
						7					4				
						7			4						
	4			10			8						計		
	5		語中	語頭	3	語中	語頭	2	語中	語頭		語中	語頭	小計	/ba/
			3			2						計			
0													計	不詳	
30	4			16			10			0			合計		

がある。「八」は付属語（係助詞ハと接続助詞ハ）の表記に多用され、「者」は自立語中の /wa/ の表記に使用されるという傾向がある点では共通している。

ところで、自立語頭の /wa/ を表す「は」が静嘉堂本に1例あるが、それは次の用例である。ハ行転呼音は自立語頭では起こらないはずのものであるが、『大成』本文の当該箇所と校合する限り、静嘉堂本中の当該箇所の「は」は「綿花」のワに相当すると考えられるのである。そのため、【表2-2-1】ではこれを語頭の /wa/ の例として扱っている。当該箇所がハタハナと表記されるに至った背景として、静嘉堂本の書写者は他の語（例えば係助詞ハ）と認識している<sup>13</sup>、あるいは、静嘉堂本がテキストとしたものにハタハナとある、などの事情があるのではないかと推測する。

○尔をひもみくるしきは多者那毛／可くさ春飛と可らにみ王可礼て  
〈静嘉堂本、二一八ウ②〉

（匂ひも見苦しき綿花も、かくさす人からに見わかれて）

○匂ひもなく見苦しき綿花も、かざす人からに見わかれて  
〈大成、一四八九⑬〉

/ba/ の表記には、静嘉堂本では「者」に集中し、天理本では「八」に集中するという相違がある。静嘉堂本では「八」「は」にも用例は一定数あり、いずれも、付属語の /ba/ の表記に多用されている。なお、その付属語とは、接続助詞バ・副助詞バカリ・係助詞ハの連濁である。また、自立語中の

/ba/ には「者」が使用される傾向が、静嘉堂本にも天理本にも共通して見られる。

字母に注目すると次のように言える。

「者」は殊に自立語の /ba/・/wa/ の表記に多用される傾向がある。これに対して「八」「は」は付属語の /wa/・/ba/ の表記に多用される傾向がある。この傾向は、天理本にも静嘉堂本にも見られる共通の傾向である。また、用例の少ない「盤」についても、これが、付属語の /wa/・/ba/ の音節の表記に使用されるという傾向もまた、天理本にも静嘉堂本にも見られる。

ところで、静嘉堂本に「者」の用例の多いことについて付言しておきたい。静嘉堂本において「者」の使用例が多いのは、付属語（係助詞ハ・接続助詞バ・副助詞バカリ）の表記に用いられているためだと考えられる。「者」は、自立語の音節を表す傾向が顕著に見られることを先に述べたが、この傾向は『源氏物語』の他の写本にも見出されることがあるとされている（斎藤二〇一一・竹部二〇一五・二〇一八）。しかし、斎藤（二〇一一）や竹部（二〇一五・二〇一八）に拠れば、「者」が付属語の表記に使用される例は多くはない。このことから、静嘉堂本の際立った特徴として、かつ、他の写本とも異なる特徴である可能性のある点として、文章中で頻用される付属語の表記への「者」の多用が挙げられるのである。

以上のように、天理本と静嘉堂本の「は」「八」「者」「盤」

の使用の特徴として、「は」「ハ」が付属語の */wa/*・*/ba/* の表記に多用され、「者」が自立語頭の */ba/* と自立語中の */wa/* を表し、「盤」の使用例が少ないことを共通点として挙げることができる。一方、相違点として、天理本には「者」「ハ」が多用され、「者」が自立語、「ハ」が付属語を表す傾向にあること、これに対し、静嘉堂本では「者」に集中すること、静嘉堂本において「者」が付属語の */wa/*・*/ba/* の表記に使用されることを挙げることができる。

### 三・五、「江」の使用傾向

先に見たように、静嘉堂本にも天理本にも「江」の使用例があり、ヤ行のエ段音の表記に使用される傾向が見られる。

静嘉堂本の4例の「江」は、はキコエ（ヤ行下二段活用動詞キコユ、および、キコユを語構成要素に持つ複合語）、動詞エラブ、副詞エ（2例）<sup>14</sup>の表記に使用されている。静嘉堂本では、キコエ（語構成要素に持つ複合語や名詞を含む）は67例あり、その表記は「江」による1例のほかは、「え」（56例）と「盈」（10例）が負っている。副詞エは5例あり、「江」の2例以外は「え」で行われる。動詞エラブは「江」による1例のみである。

天理本の14例の「江」は、キコエの表記に13例、名詞御心バへの表記に1例用いられている。なお、天理本では、キコエは61例あり、その表記は「江」で行う13例以外はす

べて「え」で行われる<sup>15</sup>。心バへは4例あり、「へ」2例、「え」1例、「江」1例の表記例がある。

このように、静嘉堂本と天理本ではヤ行に活用するキコユの語尾の表記に「江」を用いるという共通の傾向が見出される。なお、同じくヤ行に活用する動詞映ユの連用形活用語尾は、静嘉堂本では「え」「へ」、天理本では「盈」で表記され、「江」は用いられない。

○飛め君の／御こと越毛あ奈可ち尔毛きこ江多万ふ尔  
曾あ里／ける  
〈静嘉堂本、一五オ①〉

（姫君の御ことをもあながちにも聞こえたまふにぞありける。）

○古、路尔江こそ可者ら佐里个れ

〈静嘉堂本、二五ウ③〉

（心にえこそ変はらざりけれ）

○す起わさを江ら者れ多留本と心尔く可り个り

〈静嘉堂本、二九オ⑦〉

（好きわざを選ばれたるほど心にくかりけり。）

○那支みわら／飛みきこ江給うて

〈天理本、一九ウ②〉

（泣きみ笑ひみ聞こえたまうて）

○うへ□御心者江／毛あさからねと

〈天理本、四〇ウ⑦〉

（上□御心ばへも浅からねど）

### 三六・「ん(モ)」の使用傾向

モの表記に「ん(モ)」があたることのあることは第二節―二で述べた。その「ん(モ)」が静嘉堂本にも天理本にも見られる。

この「ん(モ)」は、トにモが後続する際に使用される傾向のあることが指摘されているが(中川一九九四・堀川二〇一五)、資料中の「ん(モ)」にもこれはあてはまる。静嘉堂本の「ん(モ)」22例は、すべて、トにモが連続する場合に用いられている。天理本の「ん(モ)」にもこの傾向は顕著であり、22例中20例はトに後続している。これに当たらないものが2例である。

○御前の事とん／と者勢給 〈静嘉堂本、二九才⑤〉

(御前の事ども問はせたまふ。)

○をまへ能花の木とんのな可尔 〈天理本、一八ウ⑩〉

(御前の花の木どものなかに)

○殿のおほしの多ま／う志わ可さまなとおんほしいて、

〈天理本、三〇才⑨〉

(殿の思しのたまうし我がさまなどを思ほし出でて、)<sup>(16)</sup>

○うちわ多りなとま／かりありきてん殿お者しさま

し／かはと思多まへ志ら類、ことおほ九こそ

〈天理本、一八ウ④〉

(「内裏わたりなどまかり歩きて、殿おはしさましかばと思ひたまへしゐること多くこそ」)<sup>(17)</sup>

「ん(モ)」に関連して、次のことを付言しておきたい。

静嘉堂本に見られる、「ん(モ)」と「も」の混同が疑われる箇所についてである。

○さ起の可んの君可多地を可へ／てもとおほし堂つを：

とき見多地能申給へ八 〈静嘉堂本、三三才④〉

(前の尚侍の君、かたちを変へてもとおぼしたつを、  
「…」と、君達の申したまへば、…)

この例は、出家を望んでいた玉鬘が、尚侍の地位を娘に譲ったことにより心配事がなくなったので、その望みを「遂げよう」と決心するという場面である。つまり、用例中の傍線部は、完了の助動詞ツと推量の助動詞ム(ン)とあってほしいところなのである。このことから、静嘉堂本の書写者は、静嘉堂本がテキストとしたものに「(て)ん」とあるところをモの異体字<sup>(18)</sup>「ん(モ)」と判断し、それを、「ん(モ)」ではなく、「も」と書写したのではないかと推測されるのである。

### 四・敬語動詞の表記

第二節において、天理本には漢字「侍」が使用されないこと、静嘉堂本と天理本との間で「給」の使用頻度の異なることを見た。「侍」「給」は敬語動詞の表記に関わるものである。そこで、敬語動詞の漢字表記と仮名表記とについてを確認するために、その様相を一覧にしたのが【表3】である。天理本補筆の様子も参考までに挙げる。タマフに

については、四段活用と下二段活用に表記との間に漢字表記と仮名表記の棲み分けが見出されなかったため区別せずに扱っている。また、オボス・オモホス・キコス・キコシメス・マキル（およびこれらを語構成要素に含む複合動詞）は仮名表記例のみであるため、ここでは除外する。

#### 四・一・漢字表記と仮名表記

【表3】から明らかなように、敬語動詞の漢字表記と仮名表記には天理本と静嘉堂本では明らかに相違がある。殊に、タマフ・マウス・ハベリではその傾向が顕著である。

タマフは、静嘉堂本では漢字表記にする傾向が顕著であり、天理本では仮名表記にする傾向があり、かつ、そのタの表記には「多」が多用されることは先述のとおりである。ノタマフ・ウケタマハルについては、双方とも仮名表記のほうが用例が多いが、静嘉堂本のほうが漢字「給」を用い

【表3】敬語動詞の漢字表記と仮名表記

表 1 歌仙動物の漢字・仮名と読み仮名														
ハベリ			サブラフ		マウス		ウケタマハル		ノタマフ		タマフ			
はんべ(り)	はべ(り)	侍(り)	さぶら(ふ)	候(ふ)	まう(す)	申(す)	うけたまはる	うけ給は(る)	のたま(ふ)	の給(ふ)	たま(ふ)	給(ふ)		
6	14	9	11	2	0	18	3	1	24	6	88	251		静嘉堂
0	25	0	10	0	12	5	4	0	26	1	238	53		天理
0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	16	天理補筆	

る例は多い。

マウスについても同様であり、静嘉堂本は漢字表記のみであり、天理本は仮名表記にする傾向がある。

サブラフは、二本とも仮名表記例が多いが、漢字表記例があるのは静嘉堂本のみである。

○…と可多く於毛ひ給へなんわつらふと／申給へ者

〈静嘉堂本、六ウ②③〉

(「…」とかたがた思ひたまへなんわづらふ。」と申したまへば)

○…となむ思多ま／へわつら布とまう志多まへ八

〈天理本、八ウ⑤⑥〉

(「…」となむ思ひたまへわづらふ。」と申したまへば)

○し八し候給うなんと

〈静嘉堂本、二四ウ⑦〉

(しばしさぶらひたまふなんと)

○志者し八さふら飛多ま飛なんやと

〈天理本、三三オ④〉

(しばしはさぶらひたまひなんやと)

ハベリは、天理本には漢字表記例がない<sup>19)</sup>。静嘉堂本には漢字表記例があるが、仮名表記例が優勢である。

また、静嘉堂本にのみ、撥音を含む「はんべり」が6例ある。6例のうち5例は六丁表裏に、いずれも、夕霧の玉鬘に對する発話文内に現れる。1例は一一丁表に、薫の玉鬘に對する発話文内に現れる。ただし、夕霧・薫から玉鬘への発話文内に常にハンベリが現れるわけではなく、ハ

べりも現れる<sup>(20)</sup>。

○可なら春そ乃心さし御らんせられよと／いまし免者  
んへ里給

〔『必ずその心ざし御覧ぜられよ』といましめはん  
べり。〕

○日可ことす累わ／佐とこ曾きゝ者んへ礼

〈静嘉堂本、一一オ⑥〉

〔『ひがごとするわざ』とこそ聞きはんべれ。〕

このように、殊にタマフ・マウス・ハベリについては静嘉堂本では漢字で表記する傾向が顕著であり、天理本では仮名書きにする傾向が顕著である。

なお、天理本補筆ではウケタマハル・オボス・オモホス・キコス・キコシメス・マウス・マキル（およびこれらを語構成要素に含む複合動詞）の用例はない。タマフ・ノタマフ・ハベリについては、漢字表記例のみが見られる。天理本はこの三語を仮名表記する傾向にあるので、これが天理本と天理本補筆の相違点の一つであると言える。

#### 四・二・天理本に見られる「たま」「多ま」

ところで、天理本の仮名書きのタマフには活用語尾の表記のない、「たま」「多ま」と表記されるものが10例あり、四段動詞9例（連用形8例・終止形1例<sup>(21)</sup>）、下二段動詞1例（連用形）である。この四段動詞タマフの連用形8例のうち、6例はタマ＋接続助詞テであり、2例はタマ＋過去

ケリである。

○まつ／女御とのゝ御方尔わ多里多まで可んの支み／  
八御毛の可多里を那むきこ江多まふ

〈天理本、三一ウ④〉

（まづ、女御殿の御方に渡りたま（ひ）て、尚侍の  
君は、御物語をなむ聞こえたまふ。）

○よろしうをいいて／つ類女こはへらまし可八と思多  
まよりな可／ら

〈天理本、九オ③〉

（『よろしう生ひ出でつる女子侍らましかば。』と思  
ひたま（へ）よりながら、…）

天理本では非音便形の四段動詞タマヒ＋接続助詞テは14例、ウ音便形タマウ＋接続助詞テは3例あり、促音便形タマツテの用例はない。タマテは促音便の促音の無表記<sup>(22)</sup>かとも考えられるものの、タマ＋ケリの用例のあることを考えると、語尾表記のない理由を、非音便形と音便形の棲み分けにのみ求めるのは性急かと考える。また、下二段動詞にも語尾を表記しない「たま」例が1例ある。よって、四段動詞と下二段動詞の弁別のために語尾を表記しない「たま」「多ま」を用いているとも言い難いと考ええる。

本稿では天理本に仮名書きで活用語尾の表記のない「たま」「多ま」があり、静嘉堂本にはその例がないという相違があることを指摘するにとどまる。



## 五・付記・音便形の出現頻度の相違

前節で、音便に関連する事柄に触れたが、実は、天理本と静嘉堂本の相違点として、天理本の、音便形の多さが挙げられる。音便は音韻論の問題ではあるものの、音韻と文字表記は表裏であり、「筆者の表現意識の問題でもある」（甲斐一九七八）ので、本節で指摘しておく。

静嘉堂本と天理本の音便形についてまとめたのが【表4】である<sup>23)</sup>。天理本補筆に見られる音便形については天理本の用例数の右側に（ ）で括って示す。静嘉堂本と天理本補筆の対応については静嘉堂本の用例数の右側にへ／で括って示す。

【表4】

の「静嘉堂本のみ音便形」「天理本のみ音便形」とは、静嘉堂本と天理本との対応

【表4】音便形の用例数

静嘉堂本						
対応語がない	対応語が異なる-2	対応語が異なる-1	天理本と一致	静嘉堂本のみ音便形		
3			1	4	8	イ音便
7	1	3 (1)	33 (1)	8 (1)	55	ウ音便
3		1	12 (1)	2	19	撥音便
					82	計
天理本 (天理本補筆)						
対応語がない	対応語が異なる-2	対応語が異なる-1	静嘉堂本と一致	天理本のみ音便形		
		2	1	15 (3)	18 (3)	イ音便
13 (2)	1	14	33 (1)	85 (2)	146 (5)	ウ音便
		5	12 (1)		17 (1)	撥音便
					181 (9)	計

箇所、一方が音便形で現れ、もう一方が非音便形の場合のことである。

○可きおき多まへ累御曾うふんのふ三と毛

〈静嘉堂本、二オ④〉

（書き置きたまへる御処分の文ども）

○可支／越い多まへ類御所ふんのふみ

〈天理本、二オ⑩～二ウ①〉

（書き置いたまへる御処分の文）

「静嘉堂本と一致」「天理本と一致」とは、静嘉堂本と天理本の対応箇所の単語が一致し、両方が音便形で現れるもののことである。

○おのつ可らな里いて給ぬへ可免り

〈静嘉堂本、二オ⑩〉

○をの／つ可らなりいて給ぬへかめり

〈天理本、二ウ⑧〉

（おのづからなりいでたまひぬべかめり。）

「対応語が異なる-1」とは、一方が音便形として現れるのに対し、これに対応するもう一方の当該箇所に同語の異なる活用形が現れたり、異なる単語の非音便形が現れたりするもののことである。

○んこ尔て毛み万本しう於ほし堂／里

〈静嘉堂本、四ウ②〉

（婿にても見まほしう思したり。）

○むこ尔てみまほしと／おほい多り



（婿にて見まほしと思いたり。）

〈天理本、五ウ⑨〉

○川まおとよくて

〈静嘉堂本、三〇ウ⑦〉

（爪音よくて）

○つまをとを可／しうて

〈天理本、三九オ⑨⑩〉

（爪音をかしうて）

「対応語が異なる―2」とは、静嘉堂本と天理本の双方が音便形であるが、対応する単語は別単語であるというものである。

○などの給てなつ可しう毛のきこえ給なと／数

〈静嘉堂本、五オ③〉

（…などのたまひて、なつかしうものきこえたまひなどす。）

○なと／の多ま飛てけなつ可しう□のゝ多ま飛那／と数

〈天理本、六ウ④〉

（…などのたまひて、けなつかしう□ののたまひなどす。）

「対応語がない」とは、一方の当該箇所が音便形として現れるのに対し、これに対応するもう一方の当該箇所には異同や落丁のために単語が存在しない場合のことである。次例に対応する箇所は天理本では落丁である。

○可く佐ま／尔うつ／くしうて

〈静嘉堂、三四オ⑪⑫〉

（かく、さまざまにうつくしうて）

さて、【表4】に明らかなように、ウ音便形の用例が天理本に非常に多い。その、ウ音便化する語は、形容詞が106例（異なり語数69）と大半を占める。残る40例は、形容動詞（カウザマナリ・カウヤウナリ）、動詞（思フ・ノタマフ・タマフ）・副詞（カク・トカク・カクテ）・助動詞（ベシ・マホシ）に生じたものである。静嘉堂本も同様に、形容詞の例が48例（異なり語数34）とほとんどであり、形容動詞（カウザマナリ）・動詞（タマフ）・副詞（カク）・助動詞（マホシ）の例もあるが、天理本に比べて異なり語が少ない。天理本には形容詞が延べ359語ある。そのうち、ウ音便形が106例を占める。非ウ音便形70例である。つまり、天理本の形容詞全体の約3割、形容詞連用形では、約6割がウ音便形なのである。一方、静嘉堂本には形容詞は延べ410語ある。そのうち、ウ音便48例に対し、非ウ音便形147例である。つまり、静嘉堂本の形容詞全体の約1割、形容詞連用形では25割がウ音便形である。このことから、静嘉堂本に比べて天理本の形容詞のウ音便形の出現頻度は高いと言える。

イ音便形も天理本に多い。イ音便形の用例は、天理本では形容詞のイ音便例が10例（異なり語数7）と半数を占める。このほかに動詞（ウチ泣ク・思ス・書キ置ク・コトサラメク・奏シ置ク・トキメク・泣ク・ナマメク・フルメク）に生じる例がある。これに対し、静嘉堂本では動詞（思ス・書ク・泣ク・ナマメク・ホノメカス）・副詞（マシテ）に

生じた例を見るものの、形容詞のイ音便化例が見られない。なお、天理本の形容詞の延べ<sup>359</sup>語のうち、イ音便形は10例、非イ音便形は89例である。一方、静嘉堂本の形容詞の延べ410語のうち、イ音便形がなく、非イ音便形が122例である。

ところで、『大成』の竹河では形容詞のイ音便形はアハツケイ〈大成、一五〇〇⑨〉とハカナイ〈大成、一四九六②〉の2例である。また、桜井(一九六六)に拠ると、『源氏物語』におけるイ音便の例は12例(アハツケシ・カタシ・カラシ・クルシ・ソコハカトナシ・ツラシ・ナツカシ・ハカナシ・ビンナシ・ラウタシ)であるとされる。これに対して、天理本ではアハツケシ・ウルサシ・コヨナシ・ハカナシ・人ワロシ・ワカシの6語のイ音便形が見られる。すると、『大成』本文に比して天理本ではイ音便の出現頻度が高く、天理本では『大成』では音便化しない語(ウルサシ・コヨナシ・人ワロシ)にもイ音便化が生じているということになるのである。

このように、天理本には音便形が多く現れ、殊に、形容詞ウ音便形が非常に多いという特徴がある。

## まとめ

以上、伝西行筆とされる静嘉堂本と天理本の、表記の特徴について考察を行った。本稿で述べたことをまとめると

次のようになる。

一・静嘉堂本・天理本・天理本補筆には、使用される漢字と変体仮名の種類と使用頻度に相違がある。

二・静嘉堂本と天理本には表記上の共通した傾向が見られる。

- ・「志」を自立語頭のシの表記に使用する傾向がある。
- ・「ん(モ)」をトとモが連続する際に使用する傾向がある。

- ・「は」「八」を付属語の<sup>/wa/</sup>・<sup>/ba/</sup>、「者」を自立語頭の<sup>/a/</sup>・自立語中の<sup>/wa/</sup>の表記に使用する傾向がある。

- ・「江」をヤ行に活用する語のエ段音の表記に使用する傾向がある。

三・静嘉堂本には次の表記上の特徴が見られる。

- ・「お」を助詞ヲの表記に使用することがある。

- ・「ん(ム)」を自立語の<sup>/mu/</sup>・<sup>/u/</sup>(<sup>/m/</sup>)の表記に使用する。

- ・「者」を多用する傾向があり、自立語にのみならず、付属語の表記にも使用する傾向がある。

- ・敬語動詞タマフ・マウス・ハベリを漢字で表記する傾向がある。また、ハベリをハンベリと表記する例がある。

四・天理本には次の表記上の特徴が見られる。

- ・「支」を君(キミ)のキの表記に多用する。

- ・「志」を自立語中と付属語のシの表記に使用する傾向がある。

- ・「多」をタマフのタの表記に多用する。
- ・「者」を自立語の表記に、「ハ」を付属語の表記に使用する傾向がある。
- ・「ん(モ)」をトとモの連続以外に使用することがある。
- ・敬語動詞タマフ・マウス・ハベリを仮名で表記する傾向がある。また、タマフの語尾を表記しない「たま」「多ま」の例がある。
- ・音便形が多く現れる。殊に、形容詞のウ音便形が非常に多い。また、形容詞のイ音便の例もある。

## 注

- (1) 国史大辞典編集委員会(一九八五)、上田・西澤・平山・三浦(二〇〇一)。
- (2) 静嘉堂本と天理本に用例に中古(平安時代)の標準的語法から逸脱する点があることについては、別稿(竹部二〇一九)で述べた。
- (3) 天理本の解題(曾澤太吉執筆)では「本帖装幀の際にすでに」「欠落していた」とされている。
- (4) 注3に同じ解題。
- (5) 当該の文字が漢字の概念と一致する場合は漢字として扱う。たとえば「我が身」の「身」は漢字、「三の身や(三宮)」ではひらがなとするという具合にである。
- (6) 【表1―2―1】を見ると、天理本では「見」は仮名としても使用しないことがわかる。

- (7) 「ㄱ」は「曾」として扱うこととした。
- (8) 中川(一九九四)。
- (9) 本稿では、古代日本語の音価を精密に表記することはず、音韻によって//に括って示す。
- (10) ヲを表記する「お」は、「お」に「と」が後続する際に7例、「ゝ」「い」「者」が後続する際に各2例ある。また、九丁〜一四丁までに8例が集中している。
- (11) 平安時代末に成ったと目されている国宝『源氏物語絵巻』の「詞書」に、「胸」を「无ね」と表記する例があるとの報告がある(竹部二〇二五)。
- (12) 矢田(一九九五)、高田・斎藤(二〇一三)。
- (13) 係助詞ハ、あるいは、副詞ハタであるとしても、後続との文意が通らない。ただし、天理本にはテキストとして不成立の、文意の通らないところは散見される。それらと併せて、当該例については今後なお考察を要する。
- (14) 副詞エは「善シ」に由来し、ヤ行のエであると言われることがあるが、『善し』の語幹とする説があるが疑わしい(『古語大辞典』(小学館)。副詞「え」の項目。築島裕執筆)として、ア行のエであるとされる。
- (15) 天理本の「江」は行頭に2例、行末に5例現れる。静嘉堂本の「江」にはこのような出現位置の特徴が見出されない。天理本では「え」が行頭に現れる場合(10例)も、行末に現れる場合(6例)もあり、かつ、その「え」はヤ行に活用する語の活用語尾でもあるから、「え」と

「江」に出現位置による棲み分けがあるとは言い難い。

(16) 当該箇所には『大成』本文に「おほしいて」とあることに照らして、「おもほしいづ」のモに「ん(モ)」が充てられたものと判断する。

(17) 当該箇所の文脈、および、『大成』本文では「内裏わたりなどまかりありきても」とあることに照らして、「てん(完了の助動詞ツ+推量の助動詞ム)」ではなく接続助詞テ+係助詞モと判断する。

(18) 堀川(二〇一五)。

(19) 天理本では「侍」を使用しないので、「侍従」も「しゝう」「志ゝう」と仮名で表記される。

(20) 「訓点資料に多く見られる」(『日本国語大辞典 第二版』「はんべり」の語誌)とされるハンベリは、桜井(一九八三)に拠れば、「今昔ころになると敬度も低下し」「漢文訓読語系のハンベリ、ハンベル」などの語形も行われた」という。ただし、静嘉堂本のハンベリには敬度の低下は認められず、ハンベリとハンベリの併存の事実のみが確認される。

(21) 次の例は、本文を校訂する限りにおいて、終止形の活用語尾の非表記と判断される。しかし、第五節に述べるように、天理本には音便形が頻出することを考え合わせると、連用形「たまう」を書写者は想定しているとも推測される。

○可や／うなるお里おほかれ八をのつ可らけと／を可

ら数み多まうたてなれくこ那と／盤うらみ可けねと(天理本、三九ウ⑤)

(かやうなるをり多かれれば、おのづからけ遠からず見たま(ふ)。うたてなれなれ(し)うなどは恨みかけねど)

(22) 久曾神(一九九二)を参照すると、タマテはウ音便形「たまうて」の無表記とも考えられる。ただし、ウ音便形のタマウテと非ウ音便形のタマヒテの両方の用例があるので、その棲み分けのための無表記とも、やはり、考え難いのである。

(23) 語尾表記のない「たま」「多ま」は、第四節―二、および、注22で述べた理由があるので、音便の用例には含めないこととした。

#### 参考文献

上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門監修(二〇〇一)『日本人名大辞典』講談社

江口正弘(一九七五)「中古和文資料における動詞の音便形―源氏物語のイ音便ウ音便を中心に―」『国語と国文学』

五二―五

甲斐睦郎(一九七八)「青表紙本源氏物語における形容詞連用形のウ音便について―その表現への志向―」『国語国文』四七―八

木之下正雄(一九五八)「形容詞イ音便化の条件」『国語国

文』二七—二一

久曾神昇(一九九二)『平安仮名書状集』汲古書院

国史大辞典編集委員会(一九八五)『国史大辞典 第六巻』

吉川弘文館

財団法人静嘉堂編(一九八〇)『物語文学書集成 第二編

(マイクフィルム)』雄松堂書店

(一九八四)『静嘉堂文庫所蔵物語文学書集成 収

録書總目録』雄松堂書店

斎藤達哉(二〇一一)『米国議会図書館蔵源氏物語写本にお

ける《ハの仮名》—異体仮名【八】【者】【盤】

【は】の試験的調査—『日本古典籍における【表記情

報学】の基盤構築に関する研究Ⅰ』国文学研究資料館

(二〇一三)『米国議会図書館蔵『源氏物語』につ

いて—書誌と表記の特徴—』『国立国語研究所論集』六

(二〇一四)『語の表記における仮名字体の「偏り」

と「揺れ—米国議会図書館蔵源氏物語写本の「ケハヒ」

と「カタハライタシ」の表記—』『王朝を彩る軌跡』武

蔵野書院

桜井茂治(一九六六)『形容詞音便の一考察—源氏物語を中

心として—』『立教大学日本文学』一六

桜井光治(一九八三)『敬語論集—古代と現代—』明治書院

角紀子(二〇〇二)『「も」の字母に「无」はない—国語学・

古筆学の視点から—』『書学書道史研究』一一

高田智和・斎藤達哉(二〇一三)『米国議会図書館蔵『源氏

物語』について—書誌と表記の特徴—』『国立国語研究所  
論集』六

竹部歩美(二〇一五)『国宝『源氏物語絵巻』詞書の仮名表

記について—読解上の問題点と変体仮名の運用—』『言

語の研究』一

(二〇一八)『国冬本『源氏物語』の柏木と鈴虫の

変体仮名の運用』『国際関係学・比較文化研究』一六—

二

(二〇一九)『伝西行筆『源氏物語』竹河に見られ

る語法小考』『国語研究』八二

天理大学出版部(一九七八)『天理図書館善本草書和書之部

第三十巻源氏物語諸本集 一』八木書店

中川美和(一九九四)『平安時代平仮名文献における「ん」

字の表記について』『都大論究』三一

(二〇一六)『「藤原為房妻書状」における「無表

記」についての一考察』『金城日本語日本文化』九二

中村一夫(二〇一四)『仮名文テキストの文字遣—語と表記

の関係性』『源氏物語本文のデータ化と新提言』三

中村義雄(一九五四)『源氏物語絵巻の詞書について』『美

術研究』一七四

(一九八二)『絵巻詞書の研究』角川書店

堀川宗一郎(二〇一五)『鎌倉時代における仮名文書の「と

ん」—固定的連綿—』『日本語の研究』一一—四

矢田勉(一九九五)『異体がなの使い分けの発生』『築島裕

博士古稀記念国語学論集』汲古書院（矢田勉（二〇一

二）『国語文字・表記史の研究』（汲古書院）所収）

（一九九八）「平安・鎌倉時代における平仮名字体  
の変遷」『国語文字史の研究 四』和泉書院（矢田勉

（二〇一二）『国語文字・表記史の研究』（汲古書院）所  
収）

#### 付記

資料の翻刻の掲載を御許可くださった静嘉堂文庫、並び  
に、天理大学附属天理図書館に記して感謝申しあげる。な  
お、本稿は平成二八年度科学研究費補助金学術研究助成基  
金助成金（基盤研究C）による研究課題「『源氏物語』写本  
との比較から見た国宝『源氏物語絵巻』詞書の日本語学的  
研究」（課題番号 16K02731）の研究成果の一部である。